

璫などの装身具で特徴づけられ、その文化の伝統はバルティア・ササン時代に近いかかなり根強く存続したこと、アケメネス朝時代に近いころでは、鉄製兵器が普通になり、パルティア・ササン時代に至つて、吹きガラスやカット・ガラスの容器が使用され、三足土器が盛行したことなどが判明した。また正倉院伝世の瑠璃碗や安閑天皇陵出土のそれ、さらに沖ノ島祭祀遺跡発見のガラス碗などと全く同形のカット・ガラスの碗がこの方面から少からず出土する事実も確認されて、「東亜文明の一流流としての古代イラン文明」に対し重要な一証が加えられたことも見逃せない。

最後に東京大学イラク・イラン遺跡調査団は、一九六五年までの発掘成果を十五冊の報告書にまとめて出版する予定で、すでに九冊を刊行、ほかに第一回の調査の概要を一般向けに記述した「オリエント―遺跡調査の記録―」を朝日新聞社より出版したことを附記しておく。

## 第二四回 一月六日

「京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査とクシヤン学研究の新動向」

京都大学助教授 樋口 隆 康

京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊の考古学班は、一九五九年以来、七回の現地調査を実施した。

彙 報 樋口

調査の目的はガンダーラ美術の文化圏にあるこの地域の仏教関係遺跡の発掘にあつた。われわれが発掘をはじめた当時、ガンダーラ美術は、仏教の起源と関係して、様式論だけがさかんにおこなわれ、遺跡の組織的発掘はほとんどなされていなかった。そのため、土器や石器など、ガンダーラ美術を産みだした人々の生活文化に関する知識は皆無に近かつた。われわれの調査した遺跡は、次のようなものがある。

一、ガンダーラ地区 ガンダーラ平野の中心に近く、『西域記』の跋婁沙城に比定されるシヤハバズ・ガリは、アジョーカ王の碑文もあり、しかも「ヴィスヴァンタラ本生」の本縁地として知られる。この北方にあるチャナカ・デリーとメハサンダの二遺跡を発掘した。

チャナカ・デリーは、白象宮の跡といわれ、巨大な石積基壇の上に築かれた小宮殿らしき遺跡である。南の建物は六柱の間を中心とする小室群があり、北には石敷の広い中庭をかこんで、四周に小室のならぶ一区がある。

メハサンダは、東方山中の寺院址で、尾根にそつて、塔院や、僧院が散在している。

塔院の主ストウパは、南に階段のついた方基だけがのこり、その周囲におかれた奉獻塔は、何回かの増広によつて、附加されたものである。前の大階段の側辺には祠堂がならびストウッコ、石仏彫刻、クシヤン朝やクシヤノ・サーサーン朝の銅貨などが出土した。そのほか食堂、集会堂なども、附設し

である。

タレリ遺跡は深い溪谷の斜面から尾根にかけて、百数十の建物群のある山嶽寺院址である。ここでも大小の塔院や、三段のテラスにならぶストウパ、祠堂のある一劃、僧房などが発掘され、多量の石彫と小数のストウッコ像と共に、土器、鉄器などの生活用具、クシャン朝の銅貨などがでた。

そのほか、ガンダーラ地区では、カシュミール・スマスト洞窟遺跡、ラーニガットの仏教寺院址などを調査した。

二、ジェラバード地区、ガンダーラからアフガンに入つた最初の中心地で、『西域記』に那竭羅曷国とある。ここも近郊のハッダを中心として仏蹟が多い。フィール・ハナ・バサワールの洞窟遺跡と、ラルマの寺院址を調査した。とくに後者では、ストウッコの遺存したストウパを掘つた。

三、ハイバク地区、ヒンドウクシュ山脈をこえて、タシュカルガン、バルフへ行く途中、山間の盆地、ハイバクは、交通の要衝である。この近郊で、タフト・イ・ルスダムとハザール・スムの二洞窟遺跡を調査した。とくに前者は、岩をくりぬいたストウパと、数基の礼堂窟、僧房窟、食堂窟などからなつており、仏教の石窟であることは、明らかであるが、後者は、四〇〇窟以上が密集しているが仏教ではない。

四、クンドウス地区、アフガントルキスタンの中心地、クンドウスでは、三基のテベを発掘した。

バラ・ヒサルでは、テベの外側斜面の一部を掘つたが、

イスラム城址の層が深い。

ドウルマン・テベは、泥煉瓦づくりの部屋の密集した遺跡で、ヘレニズム風の礎石や、クシャノ・サーサーンアン金の貨（四世紀末）やストウッコなどがでた。

チャカラック・テベは城塞の町の遺跡で、建物は泥煉瓦と泥塊で築かれ、三層にわかれる。多数の土器のほかに、石彫仏像、菩薩像封泥、クシャーンとサーサーン朝の銅貨、中国貨幣、金指輪、金耳輪、テラコッタなどがでている。

このクンドウス地区の出土品については、ソ連領トルキスタンの古代文化との関係がとくにつよいと考えられていた。

一九六八年九月末から 十月初にかけて、ダジャーク共和国のドウシャンベで、クシャン文化研究の国際会議があつた。この会議で、ソ連は、最近の中央アジアにおける考古学発掘の全成果をわれわれに展示してくれた。その中には、クンドウス出土品と関係の深いものがある。石彫品はともに白色の石灰岩をつかい、これはオクサス河沿岸に産するものである。礎石も同じ石をつかい、形式はヘレニスティック風である。土器や、金耳飾りは、ソグド人の遺跡、ピヤンジェント出土品と同じ様式のものである。

われわれの発掘している遺跡は、今日、中央アジア美術のうちで、一つの穴場となつていた西トルキスタン地区の新しい文化様式に所屬するものとして注目される。